

諸刃の剣 映画「小学校～それは小さな社会～」を鑑賞して

伊藤 陽一（本学教職研究科准教授 教育学）

私は、昨年末に「小学校～それは小さな社会～」という映画を鑑賞した。この映画は、世田谷区立の小学校を 1 年間取材したドキュメンタリー映画で、教育大国フィンランドをはじめ海外から大反響が届いている作品である。

監督の山崎エマさんは、イギリス人の父と日本人の母を持ち、小学校は大阪の公立小学校、中学校から高校まではインターナショナルスクールで過ごし、その後は規則だらけの日本に息苦しさを感じ、アメリカの大学に進学し、現在もアメリカ社会で活躍されている。

アメリカで山崎監督は、自分としては普通に仕事をしているだけなのに、「自分の役割が分かっていて責任感が強いですね。」「すごく頑張りますね。」と褒められ、その原点は日本の小学校にあることに気付く。そして、日本の小学校の教育制度を世界中に紹介したいという意図で、映画を製作する。映画は、「6 歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12 歳になる頃には、日本の子どもは日本人になっている」という言葉通り、見事に小学校での子ども達と教師集団の姿をリアルに映し出している。

本編のメインは、一年生女子が翌年度の「一年生を迎える会」に楽器演奏を皆とやり遂げるまでの過程である。楽器演奏は、子ども達が学級会で話し合いをし、合意形成し決定したものであり、子ども達の楽器担当は、オーディションで決定する。その女子は、大太鼓のオーディションに落選するが、シンバルのオーディションで合格する。場面は、合格者を拍手で称える子や落選して涙を流す子を捉える。ある男子は、応援していた子が落選し、その悔しさからハンカチで涙を拭う。その時、担任教師は、そっとその男子に寄り添い、その子の優しい心と落選しても次に頑張ることの大切さを学級全体に伝える。

ところが、やっとシンバル役を得た女子は、練習に参加しない。音楽指導する教師は、その女子の下駄箱に練習を誘うメモを貼るがそれでも参加しない。あくまでも練習は、空き時間での自主練習なのだ。そして、その女子は全体練習の時にシンバルを正確に叩けず、指導者から「オーディションに受かったらおしまいなの?」と皆の前で厳しく指導される。指導者は、子どもの自主性を尊重し支援するが、実行できない場合は毅然と指導する。その時も落ち込む女子に対して、担任教師がその女子を見逃す

ことなくそっと寄り添い、慰め、励ます。果たしてその女子は、自主的に練習に参加するようになり、変容していく。

入学式当日、新二年生の子ども達は呟く。「私達って何なんだろうね」「心臓の一部」「私達は心臓の欠片で、皆が揃ったらこんな形になる」「一人こんなふうになら心臓はできない」「私達は過酷な楽器だよ」と。特別活動の、いや日本の学校教育の本質を突く衝撃的なやりとりを見せる。この子ども達は、たった一年間の学校教育で「日本人」になっていることに気付いているのである。

「一年生を迎える会」は、子ども達が企画し、学年全体が取り組む集団活動。そこで、個々の子ども達の責任感や協調性、集団への所属意識が育まれる。一方、ねらいが賞獲りや勝ち負け、結果だけを求めると同調圧力が発生し、それが不登校やいじめの要因となる。

つまり、ねらいが曖昧で教師集団の指導支援を間違うと「諸刃の剣」となる。今は、リスクやトラブルを伴う集団活動に対する批判の声が大きく、教師は萎縮し、取組自体を回避する傾向が強い。本編の音楽指導者の厳しい指導は、本人の揺るぎない信念による指導と児童に寄り添う担任との間の同僚性によって成立している。

また、他にも子ども達の前で、「自分の殻を破ろう」と模型の卵の殻を自分の頭にぶつける 6 年生担任も印象的である。その担任は、自分の指導が必ずしも子ども達や保護者から受け入れられないことを自覚し、葛藤している。担任は、「自分の殻を破ろう」と子ども達に訴えているが、それは悩み苦しんでいる自分自身にも向けられている。それでも担任は、6 年の学年集団をはじめとする教職員に支えられ、卒業式を終えることができた。

日本の学校教育は、学級単位とした小さな社会で実践される。その小さな社会が目指す社会は、民主主義社会であり共生社会である。映画は、「TOKKATSU」を焦点化させるが、「諸刃の剣」は特活だけに限らない。ICT 教育等然りである。学校は、「諸刃の剣」のリスクやトラブルを念頭に置き、日本の教育の良さを大切にしつつ新しい教育へ果敢に挑戦する「諸刃の剣」の使い手となる教師を同僚性の高い学校組織の中で育成することが重要である。